

堀川をめぐる人びと

堀川開削410年をふりかえる

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

堀川を描いた画家たち 猿猴庵・高雅・春江

高力猿猴庵(種信) 暮らしの貴重な記録残す

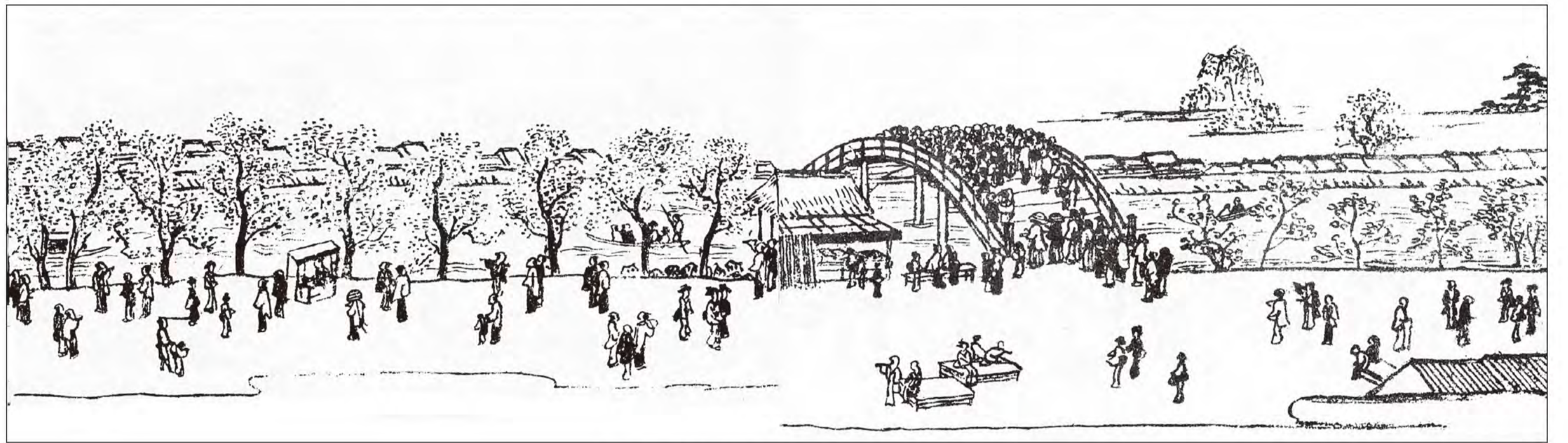
猿猴庵は尾張藩士で、見聞したさまざまな風景や事件を趣味として絵に描き、日記に書いた。

神社や寺の開帳や宝物、芝居や見世物、町の風景など雑事をこまめに記録し、その時代の様子を今に伝えている。生前に本になったものはないが、のちに『尾張名陽図会』などが出版され、江戸時代後期の名古屋や周辺の様子、当時の人々の暮らしを知る貴重な資料となっている。

独学の絵で遠近法描写

天明5年(1785)に家督を継ぎ、警備などを担当する御馬廻組で初めて出仕した。寛政4年(1792)に大御番組へ配置換えとなり、文化4年(1807)に元の御馬廻組へ戻った。天保2年(1831)に、享年76歳で亡くなっている。家禄は300石であった。

絵は独学で学び、遠近法を用いて描写している。



堀川花盛『尾張名陽図会』

外出時にはいつもメモ

外出の時には矢立(携帯できる筆)と紙を持ち、気になるものをスケッチした。視力が良く一町(約100m)離れて高札の文字が読めたという。

小田切春江は当初猿猴庵に師事し、師の7回忌にあたり七寺で追福書画会を開いた。あいにく雨模様の天気になったが、300人余が集まった。

森高雅(玉僊) 尾張名所図会や名所団扇絵に健筆ふるう



堀川日置橋より兩岸の桜を望む図『尾張名所図会』

森高雅は江戸時代後期に多くの作品を描いた画家である。『尾張名所図会』の一部挿絵や『尾張名所団扇絵』で当時の風景や人々の暮らしぶりを描くと共に、美人画や肖像画など肉筆の絵も多く描き、博物館や美術館に保存されている。

浮世絵から土佐絵へ

名古屋で浮世絵を普及させた牧墨僊や狩野派の吉川一溪、文人画家の中林竹洞に学び、浮世絵婦人画で高い評価を得て一家を成した。天保5年(1834)に大和絵の土佐光孚に入門し画風の改良をはかっている。元治元年(1864)に享年74歳で亡くなった。

弟子の育成に家元制

多くの門弟を抱え、その育成に家元制を採用して昇進などの時に謝礼を得たので、生活は安定していた。弟子の一人が小田切春江である。

小田切春江(忠近) 尾張名所図会・名陽見聞図会・名区小景・明治名古屋地図

小田切春江は尾張藩士で趣味として絵を描いていたが、その特技が認められ、藩命で絵図の作成を行うようになった。

『尾張名所図会』『名陽見聞図会』『名区小景』など数多くの作品を残し、明治には地図の作成もおこなっている。

趣味が認められ、仕事でも絵図

天保9年(1838)に家督を相続し、御馬廻役で初めて出仕した。3年後に大御番組、元治元年(1864)には御書院番へ配置換えとなり、もっぱら番方(警備担当)を務めてきた。慶応元年(1865)に尾張志附属絵図の複製、明治2年(1869)には絵図作成の仕事が命じられ、春江の特技が生かされるようになったが、この年隠居した。

明治13年(1880)に名古屋博物館附属員を命じられ、15年の内国絵画共進会では『尾張名所図会』などを著作した功績が認められ褒状が授与されている。明治21年(1888)に享年79歳で亡くなった。家禄は100石であった。

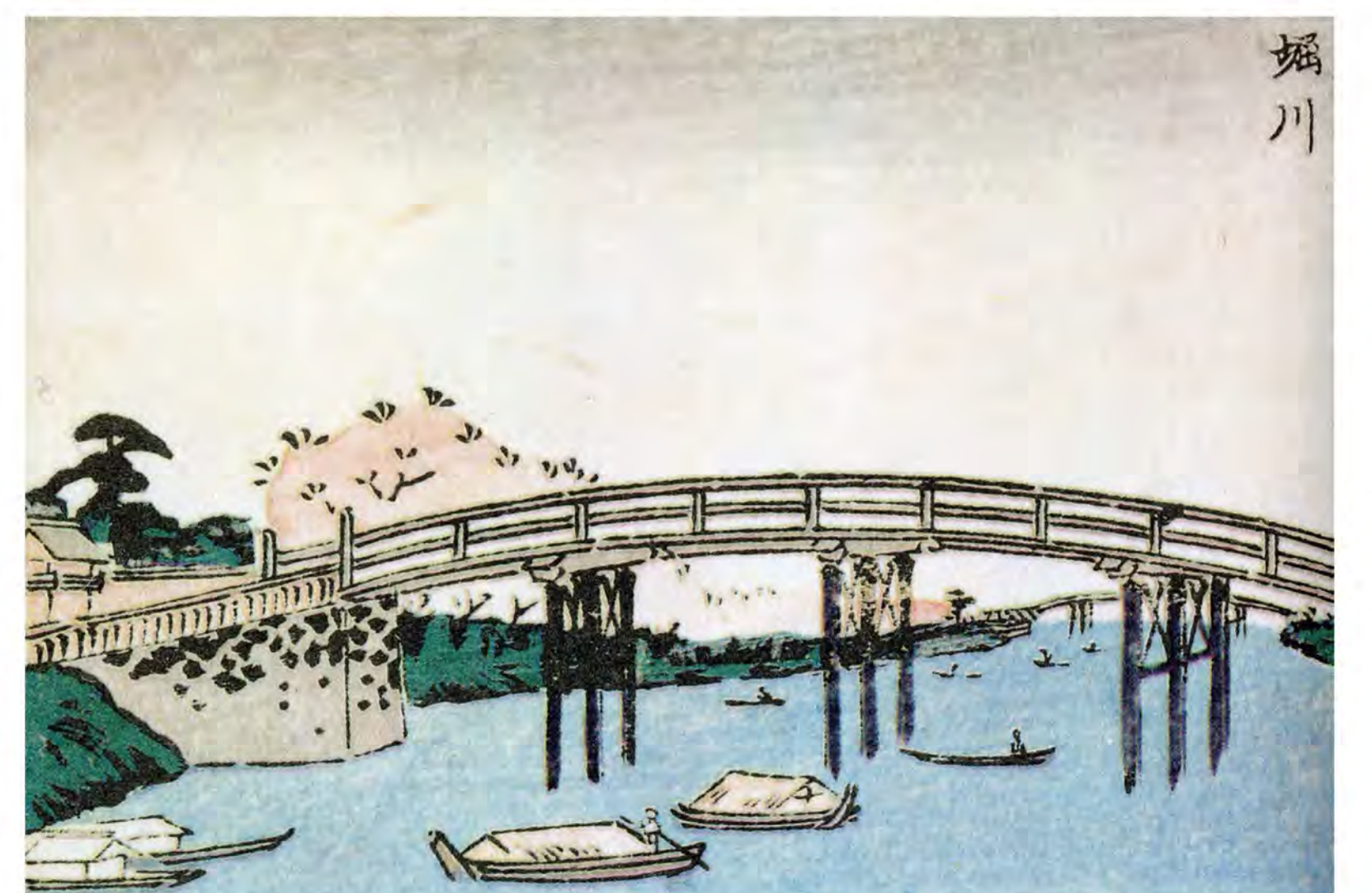
絵は、最初に猿猴庵、次いで森高雅の教えを受けた。



筆を持つ武士は春江の自画像か『名陽見聞図会』

飢餓に苦しむ人々に向き合う

20代半ばの頃は天保の大飢饉に見舞われた。飢餓に苦しむ人々に強い関心を持ち『名陽見聞図会』には炊き出しの様子や、寺院がホームレスを閉め出すために門前に柵を設けている光景を描いている。明治18年に『凶荒図録』を出版し、大飢饉の惨状を紹介するとともに日頃の心がけを説いている。



堀川『名区小景』